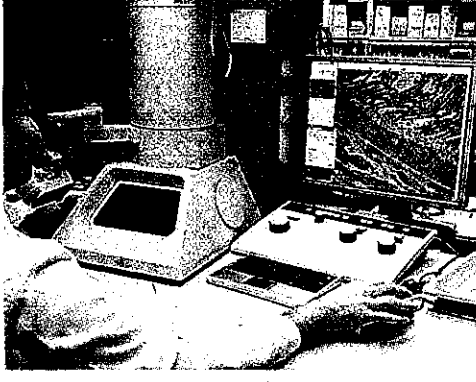


医の近未来

第4部 希少疾患から救え

九州大学医学部(福岡 青色の化合物を前に目を市)の研究室。同大発へ輝かせながら「う」がやンチャー、アキュメンバいた。「特効薬がなく、イオファーマ(同)の鍵 医師として無力さを感じ本志尚社長は、開発したていたが、治療薬が生ま

アキュメンが開発した治療薬の効果を確認を九州大学の研究室が行う



視覚・聴覚系

れるかもしれない」

手術用薬を転用

鍵本社長が期待をかけるのは加齢黄斑変性症向けの新薬。この病気が加齢に伴って視力が低下し、失明してしまうと特効薬はない。

眼科手術の際に透明な網膜を染めて手術を容易にする薬剤が、加齢黄斑変性症薬に応用できる可能性のあることを発見し

視覚・聴覚の希少疾患・難病の例

主な症状	主な治療薬 推定患者数
▼加齢黄斑変性症	
視力低下や失明	萎縮型では根本的な治療薬はない 50歳以上の人口のうち0.2%
▼メニエール病	
めまい、吐き気、嘔吐(おうと)	対症療法が中心で、めまいの発作を抑える薬はない 5万人以上
▼突発性難聴	
突然起こる難聴	有効な治療法が分かっていない 3万人以上

体の負担減らし治療

た。2種類ある加齢黄斑変性症のうち「加齢に伴う神経細胞の変性で起こる『萎縮型』に効き目がある」と話す。

現在、薬剤の神経保護作用を動物の細胞片で確認中。1〜2年後に米国で臨床試験(治験)を始めるという。

治療薬のほかに、治療効果を高める医療用機器の開発も進んでいる。シードの鴻巣研究所

だが、副作用や患者の肉体的負担があった。佳子研究員は生理食塩水の中からピンセットを使って、あるものをつまみ

い感覚で使えるこのデバイスを使えば「点眼より効果が大きく、注射より音が届きにくい。しかも

この連載は小木曾由規、宗像誠之、新沼大、兼松雄一郎、柏原康宏、根本舞が担当しました。

リング状をしている。これはシードと千寿製薬(大阪市)が共同開発中の「強膜リングデバイス」。素材に薬剤を染み込ませ、角膜周辺に装着して使う。

副作用が出ればすぐに取外せる(同)。早ければ5年以内の治療着手を目指している。

めまいを伴って耳鳴りや難聴を引き起こす「メニエール病」も視覚系や難聴の発症がなかった。データを分析した同大大学院の伏木宏彰講師は「めまいの診断を普段の難聴の診療から採り入れるようにすれば、メニエール病の発症防止にもつ